

國學院大學學術情報リポジトリ

〔佳作論文〕 鯰絵馬に込められた病平癒について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細田, 博子, Hosoda, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000308

鯀絵馬に込められた病平癒について

細田博子

はじめに

鯀は地震を想起させる生き物であると周知されている。「鯀
「地震」のイメージは、歴史を遡れば一五九二年に天正地震を
体験し大阪へ避難した秀吉の「ふしミのふしんなまつ大事にて
候のまま、いかにもへんとうにいたし可申候間」と書かれた伏
見城普請の書状に端を発しているが、一六二四年の大雑書「地
底鯀之図」にて龍王の名称のみが鯀に変えられた後、「大日本
国地震之図」にて、日本を地震から守るシンボルとして登場す

る竜が鯀に特定されたことで受容されるに至った。さらになつて一七五三年に上演された「暫」にて、竹熊入道という名で鯀坊主が現れ、「コレヤイ丁稚め、汝がなんぼ閑を据えて其処を動くまいと思つても、おれが今この髭をちつとばかり動かすと、この秋のような地震がするぞ。」^{〔1〕}という台詞を吐いているが、これは恒常的に地下の鯀が暴れて地震を起こすという俗信が、庶民の意識に深く植えつけられていたことを明示している。そして幕末の一八五五年には、その信仰に基づく鯀絵が誕生した。鯀絵とは、安政江戸地震の時に、無届で出版された錦絵である。無許可の出版物のため、版元名や絵師名は明記されないが、

浮世絵師、特に歌川派の絵師の関与が指摘されている。

これまでの研究では、安政の大地震の被害状況とその時代背景、そして鯀絵の流行した要因分析や、その悲惨な大地震災害時に、当事者である大勢の被災者達に、何故鯀を題材とし描かれた錦絵が受け入れられたのか、という理由を解明したものが大半を占めている。しかし「鯀」地震のイメージが、本当に民衆の意識の根底にあるという理由だけで鯀絵は誕生したのだろうか。筆者が鯀の伝説や俗信と鯀絵との因果関係を追求した結果、「鯀」地震のイメージは、地域によつて差異があることが浮き彫りとなった。西日本の限定的調査だが、そこから得られた結論では、鯀は「地震」より「皮膚病」の印象が強い傾向にあり、皮膚病祈願時には、鯀を描いた絵馬を奉納することが伝承されている。

そこで本稿では、調査範囲の限定を提示した上で調査結果を分析し提示したい。その調査事例にもとづいて因果関係を考察し、ひいては、鯀の表象の多様性を解明することを目的とする。

一、鯀絵馬の位置付け

絵馬研究については、『繪馬と馬』、『板繪沿革』(『定本 柳田

國男集二十七卷(新装版)一九七〇筑摩書房)のように、絵馬の本質を問う柳田國男氏や絵馬の基本概念を述べる岩井宏実氏の『近世の大絵馬』(一九七九財団法人馬事文化財団)や『日本の絵馬』(一九七〇河原書店)に詳しい。

民俗学者の柳田國男は、絵馬の起源を、「海から渡つて来たらしい日本人ではあるが、不思議に神々のみは馬に騎つて、高い山の嶺から降りたまふものと信じて居た。それが飾り馬の背上に、未だ晝かれざる神を幻覚した理由でもあれば、同時にまた繪馬を大神への贈呈の如く、考へるに至つた原因でもある」と、『繪馬と馬』にて述べている。

さらに岩井宏実は『近世の大絵馬』において、古くから日本では、神霊は乗馬姿で人界に降臨するものと考えられていたことには始まり、そのため祈願や祭礼のさいは、神霊の降臨を願い生馬を献上していたことに遡る。この生馬献上のかわりに馬形を献上する風習が生まれ、さらに馬形を簡略化した板立馬があらわれ、そこから板に描いた馬、すなわち絵馬が誕生した、と絵馬の起源について述べている。また、中世末期以来は馬以外の図柄も多くあらわれ、信仰する神仏の像や、神仏の持物や眷属、祭場や祭具、祈願内容、礼拝姿などを描いた絵馬が奉納されたことや神仏の御利益の種類によつて、またその由緒来歴

よって千差万別、多彩な図があらわれ、路傍の小祠や小堂、大社大寺の境内末社の祠堂にあげられ、それは小絵馬として脈々と今日に伝えられていることにも触れている。⁴⁾

絵馬は、主に美術的に価値のある大絵馬と民間信仰に基づき庶民が奉納する小絵馬に分けられる。岩井は「一般的通念として大絵馬は美術的に秀れ、小絵馬は宗教的ではあるが美術的には劣るという考え方がおこなわれ、小絵馬が大絵馬よりも低い評価を受けている印象をうける」としながらも、大絵馬、小絵馬は大型絵馬、小型絵馬という形の上での分類の略称である、と述べている。絵馬の形態であるが、大絵馬は二、三メートル以上、小絵馬は三〇センチ以下のものを指しているとし、絵馬が大型化するの、室町時代以後のことであると述べている。⁵⁾

松本三喜夫の『絵馬をあるきよむ』によると、絵馬そのものについては、歴史的・民俗的な見地からも、また、美術や民芸的な見地からも取り上げられることがあるとし、「本格的に何々学概論とか、あるいはそれぞれの学問などの通史的な概説の中に、きちんと評価され位置づけられるということはまずないのが現状である」との見解もある。⁶⁾

小絵馬は、室町時代中期から絵馬の形状・仕様も多種多様となり、大型の絵馬、扁額形式のいわゆる大絵馬が出現したのも

室町時代以後のことである。岩井は、「庶民の素朴な祈願が社に反映し、いきおい絵馬においても、興福寺や栄根寺の絵馬に見られるように、信仰の対象そのものを描いたり、その仏を象徴する持物や眷属を描いたり、あるいは祈願の内容を描き、願望を表示する直接的・具体的な絵を生みだした。」とも『日本の絵馬』(78頁)にて述べている。岩井は、それぞれの特徴について、大絵馬は祈願・報謝の内容をあらかじめ表出し、自らの意志と行為を公然と大衆の面前に示すものが多く、公開性をもつのに対し、庶民の素朴な祈願が主である小絵馬は匿名性をもっていると説明している。また、「従来、神社に上げられる絵馬より、寺院に上げられた絵馬の方が、民間信仰的要素が濃厚であるところから、図柄がより直接的・具体的であった」(同頁)ということから鑑みても、時代の事象を映し出している社会性をもったものという意味では、大絵馬も小絵馬も、美術的な視点要素があり、表象の枠割を担っていることは明らかである。とくに小絵馬に描かれる図は、一般民衆のいわゆる民間信仰を基礎として、一目で願いの内容を把握できる、標準や暗号の役割を担っているといえよう。

鯀絵馬については、西日本地域の鯀絵馬研究を行う半田隆夫氏の『神神と鯀』(一九九六 私家版)、『神佛と鯀』(一九九九

私家版)、『神佛と鯰 続1』(二〇〇五 私家版)や、萩生田憲昭氏の「鯰絵馬―その所在と俗信」(二〇〇五 生き物文化誌学会 京都例会)、「鯰絵馬と癡病との関わり」(『ナマズの博物誌』二〇一六 誠文堂新光社)の研究に詳細な記述がある。

鯰小絵馬の定義であるが、地域により素材や大きさが一定していないことが多く見られる。木材以外に紙に描かれた鯰の図や、額に入った鯰の絵も多く奉納されており、呼び名も「鯰絵馬」の他、「鯰図」や「鯰板」など、千差万別である。柳田國男氏は『板繪沿革』において、「繪馬の額の上縁が山形になつて居るのは、多分廐舎の正面の屋根を表はしたのがもとで、是たゞ一つから考へても、エマが繪馬から出た語だらうといふ通説は否認することが出来ない」とし、また、繪馬について、掛ける場所も自由にきめ、或は路傍の縁や老樹にも掛け、又は巫女御夢想の家に置いて来る者もあると述べている。また、岩井宏實氏も「日本人の祈りのかたち」の章にて、時代がすすむとともに村中・組中でおこなう共同祈願の方式から個人祈願が顯著になり、願い事を心に念じて口の中で唱え、願掛けの内容をより具象的に示すため絵馬を奉納すると述べている。⁸⁾つまり、絵馬の定義は、地域によるところが大きく、素材や大きさが様々であろうとも、同じ信仰に基づいた絵馬であれば、小絵馬の定

義に反してはいないといえよう。従つて、本稿ではこの定義に基づき、絵馬の素材については木材の他、銅、石、神、画、紙など多岐にわたり取り上げる。

二、鯰絵馬の所在地域と年代

まず、現代における鯰の描かれた絵馬の所在と、過去に行われた実見調査結果を元に、現在の絵馬の存在を把握する必要がある。

方法として、書籍、文献の集計結果を元に、鯰絵馬の実見調査(二〇一六年四月～二〇一七年三月)を行った。【表1】(No 1～58) 実見調査を行った神社(地蔵を含)は計58件である。静岡県、岐阜県、奈良県、京都府、大阪府、福井県、兵庫県、三重県、和歌山県、香川県、徳島県、広島県、山口県、佐賀県、大分県、長崎県、福岡県、熊本県、鹿児島県の19県が対象の県である。本稿において調査した神社(地蔵含)にて、現在もしくは過去に鯰の絵馬所在(保管)を確認(現在も確認されたのは42件、確認されなかったのは16件)した結果を下記に記す。

鯰絵馬には、地域特有の言い伝えに付随していることが多い。そのため、鯰にまつわる民話・伝説・俗信の集計結果を3種類

【表1】鯨絵馬所在表

No.	県名	寺社・地蔵名 (別名)	年代(文献)	形態	鯨絵馬の確認 数、()・図録・ 文献記載、【 ・HP上記載、 《》・大学所蔵	祈願内容	構図
1	静岡	尊永寺	大正7年	鯨絵馬	2 (複数)	皮膚病	鯨一匹2
2	岐阜	小野 庚申堂	昭和59年	鯨絵馬	29(2)	皮膚病	鯨一匹27(2)、鯨 二匹1、文字1
3	奈良	久米寺	昭和53年	木彫鯨、鯨 絵馬	1(6)	皮膚病	鯨一匹1、鯨二 匹1
4	京都	今宮神社	明治時代～ 大正時代	石画、石台、	1(1)	疫病、皮膚病	鯨一匹2
5	福井	川上 白山神 社	明治31年	鯨絵馬	2 (複数)	忌み嫌う	鯨一匹2
6	福井	虚空蔵寺(な まず堂)	不明	鯨絵馬	8	皮膚病、安産祈 願、病氣治療	鯨一匹8
7	福井	丸岡 白山神 社 (なまず鯨馬 堂)	文政12年、 天保3年、 嘉永元年、 安政5年	鯨絵馬、板絵	53 (大鯨馬1)	皮膚病	鯨一匹51(鯨と 鯨)鯨二匹1、 多数1
8	兵庫	妙観寺	天保10年	鯨絵馬	9	皮膚病	鯨二匹9
9	兵庫	白井神社	明治11年、 明治16年 (明治44年)	銅鯨絵馬、鉄 鯨絵馬	2	歯痛	鯨一匹2
10	三重	徳蓮寺	万治元年、 天保10年	鯨絵馬	161	皮膚病	鯨一匹33鯨と鯨 128
11	和歌山	奥谷薬師堂	明治20年、 明治45年	鯨絵馬	6 (複数)	皮膚病	鯨一匹6
12	和歌山	本恵寺	文化11年	鯨絵馬	4 (複数)	皮膚病、髪	鯨一匹2、鯨二 匹3
13	徳島	鉢薬師庵	明治42年	鯨絵馬	1	皮膚病	鯨一匹1
14	徳島	神宮寺	昭和20年	鯨絵馬	3 (1)	皮膚病	鯨一匹1
15	広島	勝福寺(白水 観音)	享保 明治 観音 5年	鯨絵馬、板絵	13	皮膚病	鯨一匹8、鯨二 匹3、不明2
16	山口	竹生寺	明治20年	鯨絵馬	1	不明	鯨一匹1
17	佐賀	與止日女神社 (河上神社)	不明	絵画	1	皮膚病、阿蘇信 仰	白黒鯨二匹1
18	佐賀	豊玉姫神社	不明	紙	3	皮膚病、眷属	鯨一匹1、不明
19	長崎	多良見 阿蘇 神社	不明	絵画、陶鯨、 木彫鯨	3(2)	皮膚病	鯨一匹2 (1) 黒鯨二匹1
20	福岡	玉垂命神社	昭和7、8、 14年、昭和 61年	鯨絵馬、板絵	14	皮膚病	鯨一匹7、鯨二 匹6、不明1
21	福岡	地主神社・阿 蘇神社	(昭和7年)	文字板(鯨 絵馬)	1 (1)	皮膚病	鯨二匹1、その 他1
22	福岡	伏見神社	嘉永5年、 昭和7年、 昭和24年、 昭和32年、 昭和44年、 明治42年	板絵	4 (34)【6】	皮膚病、眷属	鯨一匹1 (23)、 鯨二匹13、鯨多 数6、不明2
23	福岡	武守権現神社	平成5年	画	1	皮膚病	鯨二匹1
24	福岡	杷木 阿蘇神 社	(昭和6年、 昭和35年)	板絵	(4)	皮膚病	鯨一匹1、黒鯨 二匹1、鯨多数 1、不明1

25	福岡	田主丸 阿蘇神社	不明	画	4 (複数)	皮膚病、脊属	鯨一匹 1、鯨二匹 1 不明 2
26	福岡	中島弁財天社 (麻生神社内)	(大正 9 年)、昭和 25 年	画	4	皮膚病	鯨一匹 2、鯨二匹 3
27	福岡	大年神社	不明	板絵	1	不明	鯨多数 1
28	福岡	照天神社	不明	絵馬	1	子孫繁栄	鯨一匹 1
29	福岡	海津 阿蘇神社	不明	画、絵馬	1 (3)	阿蘇信仰	鯨一匹 1 (3)
30	福岡	賀茂神社	享保 17~18 年以降、文政 4 年	絵馬	4 (複数)	皮膚病	鯨一匹 3、鯨二匹 1
31	福岡	大森宮	平成 13 年	絵画	1 (3)	皮膚病	鯨一匹 1 (2)、不明 (1)
32	福岡	妙見神社	不明	絵馬、紙	5 (複数)	皮膚病	鯨一匹 4、鯨二匹 1
33	熊本	国造神社 鯨宮	不明	紙	(複数)	皮膚病	不明
34	熊本	遙拝神社	大正 15 年、昭和 9 年、昭和 23 年、平成 16 年	紙	20	皮膚病 阿蘇信仰	鯨一匹 15、その他 5
35	熊本	遥拝阿蘇神社	江戸 (明治) 時代、平成 19 年、平成 23 年、平成 25 年	画、紙	1 (17)	皮膚病	鯨一匹 9、鯨二匹 3、その他 6
36	熊本	平川阿蘇神社	不明	紙	1	皮膚病	鯨一匹 1
37	熊本	年禰神社	宝永 2 年	石	1	水神鯨、阿蘇信仰	鯨一匹 1
38	熊本	二宮神社	不明	紙	1	皮膚病	鯨一匹 1
39	熊本	大津山 阿蘇神社	不明	紙	1	皮膚病	鯨一匹 1
40	熊本	上川阿蘇神社	昭和 43 年、昭和 50 年、平成 元年、平成 2 年	紙	15	皮膚病	鯨一匹 14、その他 1
41	熊本	小島阿蘇神社	不明	絵馬、紙	5	皮膚病	鯨一匹 2、鯨二匹 2、不明
42	熊本	五郎丸神社 (二宮神社)	明治 33 年	大絵馬	1	阿蘇信仰	鯨二匹 1
43	奈良	地藏石仏 (別名・ナマス地藏)	天文 10 年頃から	絵馬	不明	皮膚病 菌痛	不明
44	大阪	玉津稲荷 (露天神社境内)	明治 (大正から昭和)	絵馬	(4) 複数	皮膚病	鯨一匹 (4)
45	和歌山	丹生神社	不明	絵馬	(1)	皮膚病	鯨一匹 (1)
46	香川	水主神社	江戸時代	絵馬	複数	皮膚病・疱瘡	鯨一匹 (3)
47	徳島	鯨神社	江戸時代後期	扁額	不明	皮膚病	不明
48	大分	大国主神社	(明和 2 年または天昭 (正) 六年)	絵馬	(3)	皮膚病	鯨一匹 (3)
49	福岡	崇福寺	不明	絵馬	《 3 》	皮膚病	鯨一匹 (3)

50	福岡	人丸神社	不明	絵馬	《3》	皮膚病	黒鯰一匹(1)、 白鯰一匹(2)
51	福岡	松尾神社	昭和52年迄	絵馬、紙	(複数)	皮膚病	白鯰一匹(3)
52	福岡	若宮神社	大正3年、 平成9年	絵馬、板絵、 紙	(5)	皮膚病	白鯰一匹(3)、白 鯰二匹(2)
53	福岡	七霊宮	不明	絵馬、紙	(2)	皮膚病	白黒鯰二匹(1)、 白鯰二匹(1)
54	福岡	宇原神社	昭和40年頃 迄	紙	(複数)	皮膚病	不明
55	熊本	山出神社	不明	絵馬	(1)	皮膚病	鯰一匹(1)
56	熊本	古田阿蘇神社	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
57	熊本	太刀緒神社	昭和30年頃 まで	大絵馬	(1)	皮膚病	鯰一匹(1)
58	鹿児島	天之御中主神 社	明治初期	絵馬	(1)	皮膚病	鯰一匹(1)
59	愛知	泉蔵院	享保20年、 宝暦3年	図	18	皮膚病	黒鯰・白鯰一匹 (15)、二匹(3)
60	愛知	神倉神社	文政11年	絵馬	(2)	皮膚病	鯰一匹(1)、鯰二 匹(1)
61	愛知	八柱神社	大正11年、 明治8年	絵馬	(4)	皮膚病	鯰一匹(4)
62	奈良	西門堂(法隆 寺)	不明	絵馬	2	皮膚病、病氣平 癒	鯰一匹(1)、鯰二 匹(1)
63	奈良	興福寺南門堂	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
64	奈良	大和峯薬師	不明	絵馬	不明	不明	鯰二匹(1)
65	京都	三島神社	不明	絵馬	1	安産祈願	不明
66	京都	牛頭天王社	不明	絵馬	1	瘡、腫れもの	不明
67	京都	東福寺山内弁 財天	不明	絵馬	不明	不明	不明
68	京都	玉津大明神	明治頃	絵馬	不明	じんましん	鯰一匹(1)
69	大阪	曾根埼	不明	絵馬	不明	不明	鯰一匹(1)
70	大阪	大阪付近	不明	絵馬	不明	不明	鯰一匹(1)
71	大阪	大阪付近	不明	絵馬	不明	不明	鯰二匹(1)
72	福井	中道院	不明	絵馬	1	皮膚病	黒鯰一匹(1)
73	福井	弁財天	不明	絵馬	1	皮膚病、安産祈 願	黒鯰二匹(1)
74	福井	辰巳川神社	不明	絵馬	1	皮膚病、安産祈 願	不明
75	福井	薬師堂	不明	絵馬	不明	不明	不明
76	福井	神明神社	不明	絵馬	不明	不明	不明
77	福井	春日神社	不明	絵馬	不明	不明	不明
78	福井	福井県〔原文 ママ〕	昭和35年以 前	絵馬	不明	不明	鯰一匹(1)
79	福井	福井県福井市 〔原文ママ〕	明治(末) 期		不明	不明	鯰一匹(1)
80	滋賀	観音堂	不明	絵馬	不明	不明	鯰二匹(1)
81	兵庫	薬師堂	不明	絵馬、文字 板	多数	皮膚病	不明
82	兵庫	奥畑正遍寺	不明	絵馬、文字 板	3	皮膚病	鯰一匹(2)、鯰二 匹(1)
83	兵庫	降泉寺	不明	絵馬	1	皮膚病	鯰二匹(1)
84	兵庫	阿万正福寺	不明	絵馬	1	皮膚病	鯰二匹(1)
85	兵庫	清水庵	不明	絵馬	2	皮膚病	鯰一匹(2)

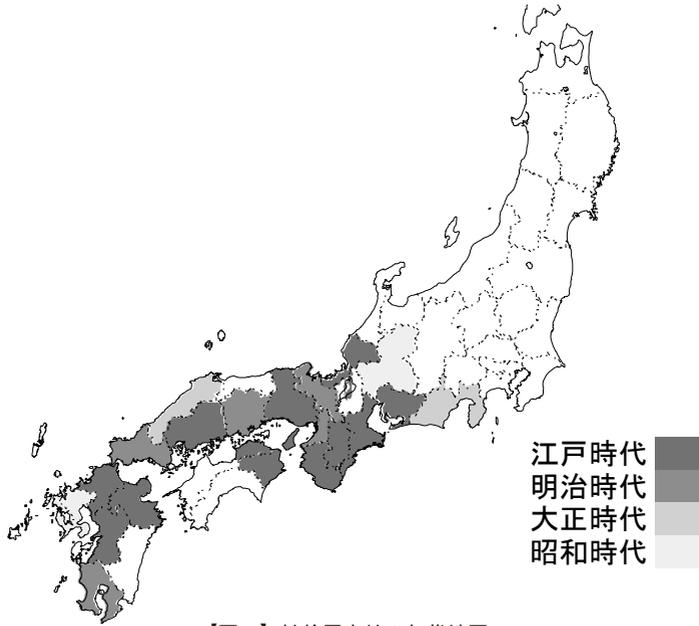
86	兵庫	長嶋観音堂	明治28年	絵馬	1	皮膚病	鯨二匹(1)
87	兵庫	白山観音堂	不明	絵馬	2	皮膚病	鯨一匹(1)、鯨二匹(2)
88	兵庫	上槻瀬薬師堂	不明	絵馬	1	不明	黒鯨一匹(1)
89	兵庫	広田神社	不明	絵馬	1	皮膚病、夫婦和合、安産祈願、現世利益	鯨一匹(1)
90	兵庫	高良神社	不明	絵馬	1	皮膚病	鯨一匹(1)
91	兵庫	住吉神社・加東郡	不明	絵馬	1	皮膚病、腫れもの	不明
92	兵庫	松原八幡神社	不明	絵馬	1	皮膚病	不明
93	兵庫	白藤稲荷社	不明	絵馬	1	皮膚病	不明
94	兵庫	城崎神社	不明	絵馬		皮膚病	不明
95	兵庫	蛇穴神社	不明	絵馬	3	皮膚病	鯨と鯨(1)
96	兵庫	薬王寺	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
97	兵庫	但馬國城崎温泉	不明	絵馬	不明	不明	鯨一匹(1)
98	三重	庫蔵寺	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
99	和歌山	薬師堂・日置川町	不明	絵馬	2	皮膚病、でん瘋	白鯨(1)、黒鯨(1)
100	和歌山	東光寺	不明	絵馬	1	皮膚病	不明
101	和歌山	薬師堂・龍神村宮代	不明	絵馬	1	皮膚病	不明
102	和歌山	浄蓮寺	不明	絵馬	1	不明	鯨二匹(1)
103	和歌山	弁財天・田辺鬮鶏社	不明	絵馬	不明	ナマズ髡	不明
104	和歌山	毘沙門堂	不明	絵馬	1	不明	不明
105	和歌山	鞍岩神社	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
106	和歌山	観音堂	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
107	和歌山	薬師地蔵寺	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
108	和歌山	子育て地蔵	不明	絵馬	不明	子育て	不明
109	香川	地蔵堂・志度寺	不明	絵馬	1	皮膚病	黒鯨一匹(1)
110	香川	白鳥神社	不明	紙	1	皮膚病	墨描き 文字のみ
111	徳島	阿波日の峰神社	不明	絵馬	不明	皮膚病	鯨一匹(1)
112	徳島	石井真之助コレクション	不明	絵馬	5	皮膚病	鯨一匹(4)、鯨二匹(1)
113	島根	産土神社	大正末期まで	紙	不明	皮膚病	黒鯨白鯨複数
114	岡山	土居神社	不明	絵馬	1	皮膚病	黒鯨一匹(1)
115	福岡	次郎太郎堂	1971頃	絵馬	数点	不明	不明
116	福岡	山田地蔵	不明	絵馬	数点	皮膚病	白鯨(1)、黒鯨(1)
117	福岡	高良神社	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
118	福岡	梅津 阿蘇神社	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
119	福岡	妙見稲荷・吉塚	不明	絵馬	不明	皮膚病	不明
120	熊本	一勝地阿蘇神社	不明	絵馬	不明	病気祈願	不明

に区分をした。民話は、民衆によって伝えられてきた物語を集め、伝説については、実際に存在する地名や人名、寺社名等のあるものを全て集めた。そして俗説は、比較的根拠のないその土地にまつわる言い伝え、全113話を集めた。また、新たに収集した文献^⑩を合わせた合計192話の中から、鯰絵馬にまつわる話のみを抽出し、実見調査により新しく得た鯰絵馬の所在掲載文献(下記に記す)を足し、総計120件において検証していく。

前述した、実見調査により新しく得た鯰絵馬の所在掲載文献は、半田隆夫『神神と鯰』一九九六 私家蔵、半田隆夫『神佛と鯰』一九九九 私家版、半田隆夫『神佛と鯰』二〇〇五 私家版、「生き物文化誌学会 福岡例会」講演資料二〇〇九 私家版、萩生田憲昭「鯰絵馬―その所在と俗信」二〇〇五 生き物文化誌学会 京都例会、萩生田憲昭「鯰絵馬と癩病との関わり」『ナマズの博物誌』二〇一六 誠文堂新光社、人吉新聞掲載記事を参考にした。^⑪(他、現地調査や図録調査から得た情報及び文献を含む)また、現代においても野外に置かれた祠に掛けられたまま、保持を強いられている絵馬も少なくなく、寺社内に保管されていたとしても経年劣化は否めず、一定の状態を保つことが難しい。更に、小絵馬の文化的及び美術的な位置づけや状態は決して高いとは主張できないことを指摘

しておきたい。文化財未認定のため行政的援助もなく、寺社の管理者や地域に住む人たちの努力によって、その存在がようやく保たれているのが現状である。文献の記載が確認されていても調査確認が不可能だった地域や、所在が不明の地域も多く存在した。管理者の高齢化や諸々の理由で、言い伝えや所在の引き継ぎが消滅していることから、図録の記述に頼らざるを得ない絵馬も少なくはない。しかしながら、実見調査の結果を踏まえ、村誌や図録を精読し、可能な限り正確な分析を試みる。

鯰絵馬の所在だが、年代別(江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代)に分類をしている。【図1】現存している絵馬、図録、文献において、該当する年代別に、絵馬の所在県を区分けしている。22県120件の寺社及び地藏尊において、鯰絵馬の所在が確認できた県は、一番多い福岡県24件、二番目に多い兵庫県19件に続き、熊本県が17件、和歌山県13件、福井県11件、奈良県・京都府・徳島県が5件、大阪府4件、香川県3件、三重県・佐賀県の2件、静岡県・岐阜県・滋賀県・広島県・岡山県・山口県・島根県・大分県・長崎県・鹿児島島の1件であることが確認された結果となった。

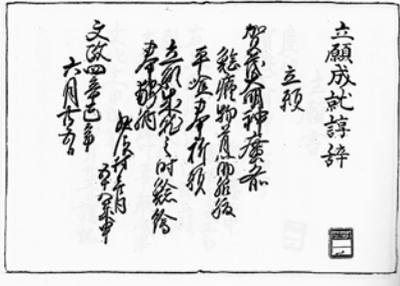


【図1】鯰絵馬奉納の年代地図

【表2】江戸時代以降に奉納された鯰絵馬所在寺社（【表1】より抽出）

	県名	寺社名	年代
1	三重	徳蓮寺	万治元年、天保10年
2	福岡	賀茂神社	享保17～18年以降、文政4年
3	愛知	泉蔵院	享保20年、宝暦3年
4	広島	勝福寺（白水観音）	享保、明治、昭和5年
5	和歌山	本恵寺	文化11年
6	愛知	神倉神社	文政11年
7	福井	丸岡 白川神社 （なまず絵馬堂）	文政12年、天保3年、嘉永元年、安政5年
8	兵庫	妙観寺	天保10年
9	福岡	伏見神社	嘉永5年、昭和7年、昭和24年、昭和32年、昭和44年、明治42年
10	熊本	遥拝阿蘇神社	江戸（明治）時代、平成19年、平成23年、平成25年
11	香川	水主神社	江戸時代

【表2】では、江戸時代に皮膚病祈願として鯰絵馬が奉納されていた畧を抽出した。(No)は【表1】参照)最古の鯰馬のある三重県の徳蓮寺 (No10) では万治元年(一六五八)の鯰馬が所蔵されている。【図2】次に福岡県の賀茂神社 (No30) は、享保十七(一七三六)十八年(西暦一七三二)三年)、西日本一帯を大飢饉が襲ったのを機に、鯰を祀っている寺社であるが、それ以降、皮膚病祈願の鯰絵馬がいつ頃から始まったのかは不明である。しかしながら、現在は享保時代の鯰馬はないが、当時鯰の鯰馬の奉納が行われていたことを記す最古の文書が保管されている



【図3】賀茂神社 (半田隆夫1996「神神と鯰」私家版 P53)

立願
賀茂大明神廣前
鯰癩物首筋・脇腹
平癒奉祈願
立願成就之時、鯰繪
奉納

【図3】これは文政四年(一八二二)には確実に「癩肌にかかったら鯰絵馬を奉納すること」が周知されていたことの裏付けになり、鯰馬奉納は、さらに以前から行われていたことが推測されよう。

次の愛知県泉蔵院 (No59) 享保二十年(一七三五)【図4】と続く。次いで広島県の勝福寺(白水観音) (No15) だが、皮膚病祈願に鯰絵馬を奉納した堂は天保十四年には再建していることは確かであるが、享保時代の年号の特定される資料は見つかっていない。【図5】。和歌山県の本恵寺 (No12) は文化十一年(一八一四)【図6】、愛知県の神倉神社 (No60) 文政十一年(一八二八)【図7】、福井県の丸岡白川神社(なまず絵馬堂) (No7) が文政十二年(一八二九)【図8】、兵庫県の妙観寺 (No8) 天保十年(一八三九)【図9】、福岡県の伏見神社 (No22)、嘉永五年(一七二〇)【図10】である。熊本の遥拝阿蘇神社 (No35) については、実見調査では昭和時代に複製された鯰馬の確認ができたものの、後に、拝殿の奥に保管されていた江戸(明治)時代の奉納鯰馬については所在が確認できたが、明確な年号を知る資料が存在しなかった。また、香川県の水主神社 (No46) については、実見調査時には鯰馬の確認がとれなかったが、後に鯰馬3枚の所在と構図、古記録から年代のみ確

認することができた。ほか、大分県の大国玉神社 (No.48)、絵馬奉納が始まった年代の特定が不可能であるが、下記の記載をあげておきたい。

「天保三年 (一八三二) 「大国玉神社」の額のかかった大きな石鳥居があります。その正面に向かうと、楠やくぬぎ、松の縁に囲まれた社殿の跡があり、東に石祠 (昭和十八年建立) と、西に古風な安山岩で作られた珍しい「庚申塚」があります。ここが惣体様で、昔から皮膚病の治癒の神様として知られています。ご神体は、戦後、鍋島神社 (貴船宮) へ合祀されていますが、ここは今も惣体様の祖宮であるお社があり、遠く北九州や安心院からも鯰の絵を奉納し祈願する人が多いといわれています。」¹³⁾

このように、皮膚病と鯰絵馬奉納の関係は深いことが明確であり、地域の人々の認識や口伝からも、その時代から皮膚病祈願の鯰絵馬奉納が行われていたと推測できる。さらには、「鍋島海岸の松腹中に惣体社と云ふ無格社がある。之れは皮膚病即ちナマヅ水瘡の守神と尊ばれ、一其の手水鉢の御水を戴いて患部を洗へば、直ちに全癒す¹⁴⁾」と記しているが、この手水鉢の御

水の効能については、勝福寺 (白水観音) (No.15) のように、お水を貰いに来て皮膚病「なまず」の治った人は、そのお札に鯰の絵をかいて奉納したという霊水伝説に通じていると考えられる。従って、大国玉神社についても、当時からお札として鯰絵馬の奉納は行われていたといえよう。以上の総合的な判断を踏まえ、【図1】では、江戸時代と区分している。

付記として、今回の調査では、絵馬の存在や、年号記載のある資料が不明であった京都府、大阪府、鳥取県、佐賀県、長崎県についても、江戸時代に鯰の絵馬が存在していた可能性は高い。その根拠として、まず該当するそれぞれの寺社や祠の創建が古く、皮膚病祈願の信仰があることや、鯰の絵馬の奉納が古くから慣習とされていた地域の人々の概念や口伝が現代にも残っているという点をあげておく。

他、奈良県の天文十年 (一五四一) 頃設立された地藏石仏 (別名・ナマズ地藏) (No.43) や、徳島県の鯰神社 (No.47) については、古くから信仰されているが、鯰の絵馬が掲げられるようになった年号の確定ができなかった。熊本県の年禰神社の石絵馬 (No.37) は、宝永二年 (一七〇五) に奉納された古いものであるが、祈願内容が皮膚病ではない。【表2】



【図2】万治元年（1658）
三重県 徳蓮寺



【図4】享保20年（1735）
愛知県 泉蔵院⁽¹⁷⁾



【図5】享保時代
広島県 勝福寺（白水観音）⁽¹⁸⁾



【図6】文化11年（1814）
和歌山県 本恵寺



【図7】文化11年（1814）
愛知県 神倉神社⁽¹⁹⁾



【図8】文政12年（1829）
福井県 白山神社⁽²⁰⁾



【図9】天保10年（1839）
兵庫県 妙観寺

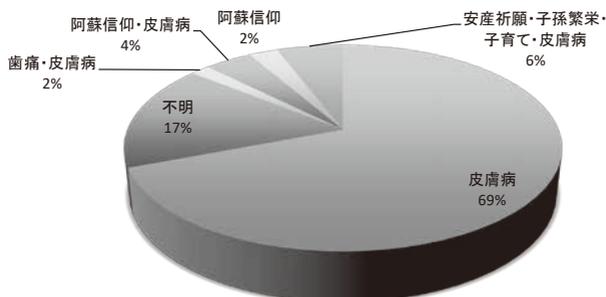


【図10】嘉永5年（1720）
福岡県 伏見神社

三、鯀絵馬の分類と構図

鯀絵馬の祈願内容のグラフを作成し概観してみた。【図11】

「鯀病」の呼び名は、白ナマズ、ナマズハダ、ナマヅ、なまずはげ、瘡、腫れもの、じんましん、でん瘋、などと、地域によって呼び名は様々である。本稿では、これらを全て「皮膚病」として区分けをした。その結果、約7割の鯀絵馬(83件)の祈願内容が、皮膚病という結果となった。歯痛(2件)や安産祈願・子孫繁栄・子育て(7件)など、寺社によっては、他の内容と複



【図11】 鯀絵馬の祈願内容グラフ

合した内容を御利益として伝わっている地域もある。それについては、文献、図録及び寺社の社伝や村誌を熟読した上で総合的に判断し、祈願の位置付けが強い内容を選定した。また、阿蘇信仰・皮膚病(5件)の項目については少数となったが、熊本県には阿蘇信仰のある寺社の御利益が、病氣祈願や皮膚病と複合している寺社が多い。皮膚病との関連がない寺社は3件であった。祈願内容が不明(20件)である寺社については、所在地や祈願内容の記載が無い場合が含まれる。寺社管理者の引き継ぎ等で、鯀絵馬の所在とともに、言い伝えや祈願内容の口伝が減少もしくは途切れてしまうことが少なくない。現代における鯀絵馬の現状も示している結果であるといえよう。

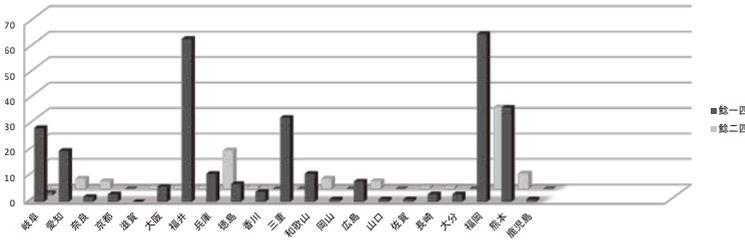
次に、鯀絵馬の構図であるが、身体にナマズが発生した時の全癒祈願、安産の祈願又は謝禮、子供の無病息災祈願、夫婦和合の祈願、結婚に就ての祈願、一般の病氣平癒の祈願^②を挙げている記述が多い。小絵馬の特徴として、性別・年齢・干支・名前は記されることはあるが、祈願の目的は公にできない心の悩みであるため記されない傾向にある^②。そこから推測するに、鯀絵馬についても、そこに描かれている鯀の数は、人の数とみて間違いはないと捉えられるがその鯀に祈願者の年齢や性別は読み取れるのだろうか。下記において、四種類に分類を試み

た。⁽²³⁾

- 1. 鯰一匹の構図
- 2. 鯰二匹の構図
- 3. 多数の鯰の構図
- 4. 鰻と鯰の構図

本稿においては、1. 鯰一匹の構図（20県310枚）71件と2. 鯰二匹の構図（14県74枚）35件【図12】、計85件において、2構図を抽出し、検証した。

まず「鯰一匹の構図」は、福岡県（65構図、以下省略）と福井県（64）に突出して多く見られる。続いて、熊本県（37）、三重県（33）、岐阜県（29）、愛知県（20）、兵庫県・和歌山県（11）、広島県（8）、大阪府（6）、徳島県（7）、香川県（4）、京都府・長崎県・大分県（3）、奈良県（2）、岡山県・山口県・



【図12】「鯰一匹の構図」・「鯰二匹の構図」県別グラフ

佐賀県・鹿児島県（1）である。「鯰二匹の構図」は、福岡県（32）、兵庫県（15）に多く見られる。続いて、熊本県（6）、愛知県・和歌山県（4）、奈良県・広島県（3）、岐阜県・滋賀県・大阪府・福井県・徳島県・佐賀県・長崎県（1）を確認することができる。

両構図に共通して多い県は、福岡県と兵庫県である。しかしながら、体系的に鑑みて地域別に意義を定義付けることは難しいと思われる。また、絵馬に描かれる鯰の大きさは、構図に関係があるようには見受けられない。「鯰一匹であれば子供に関係のある祈りであり、二匹ならば夫婦、良縁に關聯したものとされてゐる。」⁽²³⁾という記述があるように、鯰一匹は皮膚病に悩む子供についての祈願、鯰二匹は主に子孫繁栄の意味として捉え、必然的に夫婦を指すことが妥当であると考える。

四、鯰と皮膚病との関連

皮膚病の「ナマズ」とは、鯰には腹に一面鯰に似た斑点があるところから、ナマズ平癒の絵馬になったという見解が多いことと知られる。

永田は、「江戸時代から『しろなまず』と魚の『鯰』を引つ

掛けた白い「鯰」の絵を描いた⁽²⁵⁾とし、白いナマズ絵馬は、皮膚病の「しろなまず」に掛けていると述べている。先の萩生田氏は、鯰絵馬と癩病との関わりには、絵馬に描かれている魚類の「鯰」と病名の「癩」は訓読みで同じく「なまず」であることや、魚類の鯰の体表の模様と病名の癩の症状が不規則な斑紋を描くという二点が存在することを確認している。また、癩病は、平安時代中期(承平四年、九三四頃)の漢和辞典『倭名類聚抄』にも癩病の和名「なまずはだ」は歴易として認知されており、日本最古の医学全書『医心方』(永観二年、九八四年)には、白駁風(なまず肌)の治療法が記され、中国の隋時代に編纂されたとみられる医学書『病原論』には「人の頸のあたりから胸部、脇の下の皮膚が自然にまだらに剥がされた点が連なっている。色はやや白く、また烏色のものもある。痛みや痒みはない。これを癩瘍(歴易：筆者註)というのである。これもまた、邪風が皮膚に侵入し、気血と調和できないためにできるものである、と。和名ナマズハダ(奈末都波太：筆者註)」と記してあることを述べている。調査をしていく過程で皮膚病の鯰肌を白ナマズ、ナマズハダ、ナマヅ、なまずはげなど地域によって呼び名の違いがあることも分かった。要するに、鯰の肌に似ている点や、鯰と癩肌に掛けた言葉の響きなどの原因が



【図13】「ゴマナマズ」『湖中産物図證中巻2』藤居重啓 文化12(1815)

重なり次第に認知されたと考えられる。なかでもその様相は「ゴマナマズ」を指すのであろうと推測されよう。【図13】

では皮膚病の「癩病」をナマズと呼ぶようになったのは、いつからだろうか。下記では、古い年代順に関連資料を説明していく。

最古の資料としては、一六四四年に遡る。萩生田氏による記載を下記に抜粹する。⁽²⁶⁾

『毛吹草』（寛永二十一年・一六四四）

鯰一人の肌、刀の鞘、竹生嶋

『初元結』（寛文元年・一六六一）

鯰一人肌、刀鞘、竹生嶋

『便船集』（寛文九年・一六六九）

鯰一人の鞘、地震、人の肌、池、竹生嶋、弁才天

『類船集』（延宝四年・一六七六）

鯰一人の鞘、地震、人の肌、瓢箪、池、竹生嶋、弁才天

また、同氏は、俳諧や川柳に皮膚病の癩病が歌い込まれてきたことを下記のように挙げています。

●顔のなまづや化粧かすめん はれなれば心のどまぬ宮使
（林門跡）（寛文六年・一六六六）

●ひろがりて かほになまづのべんざいてん 火燧びらき
（元文三年・一七三八）

●なまざる顔にも伊達の作り髭 宝曆中神風（寛延四年・一七五一）宝曆十四年・一七六四

●いさ葉のよふに青鬼の白なまづ（松丸）柳多留百十四篇
（天保二年・一八三二）

●鳥の糞石の地蔵へ白なまづ（弁丸）柳多留百十八篇（天保三年・一八三二）

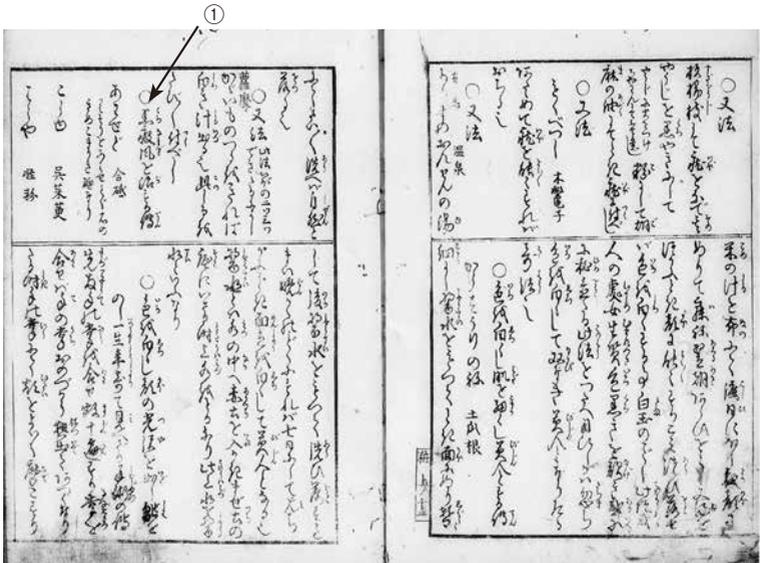
つまり、江戸時代初期から、一般的な知識として、「皮膚病」
「鯰」という認識が知れ渡っていたことが証明されよう。

そして、江戸時代後期まで続いていたという癩病は、どのような症状であったのだろうか。筆者は、当時発売されていた美容の手引書「都風俗化粧伝」に、着目したい。

癩風について、「黒癩風 癩風 俗称をへくろなまづ」という。デンブウ菌によりできる淡褐色から暗褐色の斑点。ときに逆に色素脱失斑を生ずることもある。大きさは米粒大から手掌大以

上になることもある。」「白癜風 後天的に発生する皮膚色素の脱失斑。円形または不正形で、周囲の皮膚は幾分色素が増すので、境界は明瞭である。尋常性白斑。」とある。【図14】 【図15】治療の効果のほどは確認できないが、「又法へびのぬけがら蛇脱皮」(↓③)の箇所では、「本草綱目」に「癜風白駝」蛇皮灰を醋で調べて塗る、そして駝は、まだら、つまり白癜風である。」と記載がある。
 下記に抜粋する。

○白癜風を治す伝 【図14】 ↓①
 あわせど 合砥
 かみそりをあわせとぐ石のきめこまかき砥なり。
 ごしゆ 呉茱萸
 はらや 輕粉
 ○白癜風を治す伝 【図15】 ↓②
 につけい 肉桂 一匁
 たんばん 丹礬 一匁
 けいふん 輕粉 一匁
 いおう 硫黄 二匁



【図14】「〔女子愛敬〕都風俗化粧伝 上」1813 国会図書館



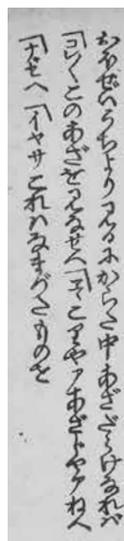
【図15】「〔女子愛敬〕都風俗化粧伝 上」1813 国会図書館

江戸時代の末期に入つて大成した、いわゆる伝統化粧を体系づけた本として名高い『都風俗化粧伝』にあることから鑑みても、長い間癩病は、世の人々に広く周知された、隠れざる悩みであつたことが裏付けられるであろう。周知されていたからこそ、同時期に、安政大地震直後に出回つた鯰絵にも、癩肌を取り上げられたと考えられる。それについては、萩生田氏が、鯰絵の「即席鯰はなし」に、癩病の症状がみられる人物が記されていることをあげている。【図16】【図17】²⁶⁾

鯰絵が震災時に流行となつたのは、悲惨な状況や苦悩を笑いで癒す要素が強く込められた背景がある。その特異な性質上、民衆の関心を引く構図が多く含まれている。つまりは認知度が高いことを裏付けている。これは鯰病に苦しめられていた者が、鯰絵が流行した幕末まで存在していたことを物語り、皮膚病の癒は、幅広い年代に関心の高い病気だつたといえるであろう。



【図16】「即席鯨はなし」東京大学附属図書館
石本コレクションⅠ所蔵



【図17】読み下し⁽³⁰⁾

結語

大絵馬は、制作する際に著名な絵師に描かせるなど、造形的にも完成度の高い作例が奉納される寺社もある。しかし今回調査した鯨絵馬の大半は、民俗芸術の役割を果たす小絵馬であり、故に素朴な画風で、地域や地元に住む人々によって描かれていたことを報告したい。

また、江戸時代には、皮膚病以外にも、下記のように疱瘡や麻疹といったはやり病が人々の重い悩みであったことが、以下、内藤記念くすり博物館発行の「はやり病の錦絵」に見るように、天然痘（疱瘡）、麻疹、水疱瘡（水疱）は人生の「お役三病」とされ、一生に一度しかかからないこの三つを無事に終えることが、健康面での最大の願いであり、特に天然痘、麻疹は死亡率が高く、一度流行すると多くの人々が命を失った。また命が助かっても痘痕が残ったり、失明したりした。親はできるだけ軽くすむように、神や呪術などにもすがって我が子の健康を祈った⁽³¹⁾ことが一般的に知られている。

少なくとも九州地方から江戸の地域の人々にとり「癩病」は身近な病であったことは明確であり、「我が子の健康を祈った」

おほぜい^(大勢)うちより見るに、からた中^(体)あざ^(患)だらけなれば、
「コレコレ、このあざを見なせへ、「エエ、こりやアあざじゃアねへ、
「ナゼへ、「イヤサ、これハなまづたものを

という点で皮膚病の悩みを持つ親や本人の心は同様であると推測される。そのすがる信仰の形に、鯀絵馬も含まれていたことであろう。

鯀絵馬の「鯀一匹」の構図は、「子供」や「一個人」を表象している、筆者は結論づける。そして、必然的に「鯀二匹」の構図では、その両親、または子孫繁栄といった子供を想起させていると推定するのが妥当ではないだろうか。「多数の鯀の構図」と「鰻と鯀の構図」の表象も含め、今後の課題としたい。

しかしながら、癩病は老若男女におこる原因不明の皮膚病である。その性質は、地震がおこる恐怖に通じるのではないだろうか。さらには、人知れず氏名や祈願内容を伏せる傾向のある小絵馬祈願は、奉納者の生まれ年の干支と男女の別のみを記載したものが多く、奉納した年が記されていることが少ない。「他人にはわからないように、祈願の一部分を象徴的に描いたもの」であるいは語呂合わせ、判じ物のような、間接的な表現の図柄⁽²⁾と永田が述べたその小絵馬の特徴は、判じ絵である作者不明の鯀絵の性質と類似している。

寛永二十一年（一六四四）の頃から、皮膚病の「癩病」は、語呂合わせも相まって同じ読みをする「なまず」と重ね、文政四年（一八二一）には癩肌にかかれば鯀絵馬を奉納する慣習が

あったことが確認された。それ故に、三十余年を経た安政二年（一八五五）の震災時に鯀絵が多数出版された際にも「癩病」の症状がみられる人物が記された作例が登場していたといえよう。以上、本稿では主に西日本で行った調査結果を踏まえ、一般的に地震のイメージが強い鯀の表象が、皮膚病平癒祈願ともに古くから深い関わりがあることを確認した。今後はさらに描かれた鯀の図像の分類を進め、表象された鯀の文化史をより深く論証したいと考えている。

注

- (1) 川那部浩哉 二〇〇八『鯀 イメージとその素顔』八坂書房 pp.12-13
- (2) 細田博子『鯀絵と鯀の民俗』二〇一二 早稲田大学卒業論文にて、鯀絵の系譜、日本全国のナマズにまつわる民話・伝説・俗信¹³話を分析し、「鯀は地震を起こす」という俗信は、地方から江戸へ伝えられた」という仮説について検証した。
- (3) 柳田國男『繪馬と馬』『定本 柳田國男集二十七卷（新装版）』一九七〇 筑摩書房 pp.342,343
- (4) 岩井宏実『近世の大絵馬』一九七九 財団法人馬事文化財団 p.8
- (5) 岩井宏実『日本の絵馬』一九七〇 河原書店 pp.63,64
- (6) 松本三喜夫『絵馬をあるきよむ』二〇一一 岩田書院 p.3
- (7) 柳田國男『板繪沿革』『定本 柳田國男集二十七卷（新装版）』

- 一九七〇 筑摩書房 P.344, P.348
- (8) 岩井宏實「暮らしの中の神さん仏さん」一九八〇 文化出版局 pp.166-169
- (9) 細田博子『鯰絵と鯰の民俗』二〇一二 早稲田大学卒業論文にて、取り上げた全国の鯰にまつわる書籍、文献から 113話(有馬英子 一九八三『阿蘇の大鯰』日本伝説体系・第14巻九州編)みずうみ書房、荒俣宏 一九八九『世界大博物図鑑』第2巻「魚類」平凡社、白井和雄 一九八九「安政大地震と鯰絵」『東京連合防火協会』12 P.23-30、尾島利雄 一九八六『鹿島社の要石』日本伝説体系・第4巻南九州編)みずうみ書房、コルネリウス・アウエハント小松和彦(ほか)共訳 一九七九『鯰絵—民俗的想像力の世界—せりか書房、喜多川守貞 一九九六『近世風俗志(一) 守貞謄稿』岩波文庫、坂田友宏 一九八四『日本伝説体系』第11巻山陰編)みずうみ書房、滋賀県立琵琶湖博物館編 二〇〇三『鯰—魚と文化の多様性—』サンライズ出版、鈴木菜三 一九八二『日本俗信辞典・動・植物編』角川書店、白井弘一・静岡県むかし話研究会 一九七八『静岡のむかし話』日本標準 一九七八、藤沢衛彦 一九五五『日本民族伝説全集』第2巻 関東篇 河出書房、民俗学研究所 一九五五『総合日本民俗語彙』第三巻 平凡社、人見必大 訳注 島田勇雄 一九七八『本朝食鑑3』平凡社、福田晃 一九八八『鯰食わず』『日本伝説体系』第8巻北近畿編)みずうみ書房、福田アジオ 二〇〇〇『日本民俗大辞典』吉川弘文館、松下幸子 二〇〇九『鯰絵が語る江戸の食』遊子館、藤沢衛彦 一九五五『日本民族伝説全集』第2巻 関東篇 河出書房、村孝三 一九八二『日本伝説体系』第12巻 四国編)みずうみ書房、村崎真智子 一九九二『阿蘇の大魚と鯰』『日本民俗学』(193)、188-191、一九九三・二 日本民俗学(193)、森誠一 二〇〇七『生き物文化誌としての「鯰」—三重県徳蓮寺の鯰絵馬から見えてくること—』ピオ
- ストーリー」8)から抽出している。
- (10) 朝倉治彦 一九九二『神話伝説辞典』東京堂出版、網野善彦 一九八九『瓢箪論争』「いまは昔むかしは今第1巻(瓜と竜蛇)」福音館書店、網野善彦『ほか』一九九三『精進魚類物語』「いまは昔むかしは今第3巻(鳥獣戯語)」福音館書店、網野善彦 一九九三『網野善彦』一九九五『屋根裏の鯰』「いまは昔むかしは今第4巻(春・夏・秋・冬)」福音館書店、安室知 二〇〇三『魚・食・祭』鯰—魚と文化の多様性—滋賀県立琵琶湖博物館編)サンライズ出版、荒木博之(ほか)一九八三『阿蘇の大鯰』(類話)『日本伝説体系』第14巻南九州編)みずうみ書房、石上堅 一九八三『日本民俗語大辞典』桜楓社、いすみ市民話集編集委員会 二〇〇八『夷隅川の大ナマス』「いすみの民話」いすみ市教育委員会、井田安雄(ほか)一九八六『鹿島社の要石』(類話)『日本伝説体系』第4巻南九州編)みずうみ書房、池原昭治 一九九三『日本の民話300』木馬書館、磯崎康彦 二〇〇六『歌川国芳論—天保の改革と歌川国芳』福島大学人間発達文化学類論集4)福島大学人間発達文化学類、稲田浩二(ほか)一九八五『狐女房—聞き耳型(類和2)』『日本昔話通観』第3巻(岩手) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八五『犬と猫と宝物(類和2)』『日本昔話通観』第3巻(岩手) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八二『五郎の欠け杓(参考話)』『日本昔話通観』第4巻(宮城) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八二『頭が池(類和4)』『日本昔話通観』第4巻(宮城) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八五『もの食う魚(類和1)』『日本昔話通観』第7巻(福島) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八五『蛙の子は蛙』『日本昔話通観』第7巻(福島) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八五『蛙の子は蛙』『日本昔話通観』第7巻(福島) 同朋舎出版、稲田浩二(ほか)一九八六『もの言う(類和3)』(類

- 和4) (類和5) (類和6) 「日本昔話通観 第8巻 (栃木・群馬) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七八『運定め (類和1)』「日本昔話通観 第9巻 (茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八六『運のよい狐師』「日本昔話通観 第10巻 (新潟) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八六『もの言う魚 類和3』」「日本昔話通観 第11巻 (富山・石川・福井) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八一『なますとくものけんか』「日本昔話通観 第12巻 (山梨・長野) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八〇『大鳥とえび (類和2)』」「日本昔話通観 第13巻 (岐阜・静岡・愛知) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八〇『もの言う魚 (類和3)』」「日本昔話通観 第13巻 (岐阜・静岡・愛知) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七七『なますときじと火の粉』「日本昔話通観 第14巻 (京都) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七七『くも報恩』「日本昔話通観 第14巻 (京都) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七七『うとんなます』「日本昔話通観 第15巻 (三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七八『三匹猿』「日本昔話通観 第16巻 (兵庫) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七八『なますの夢判断』「日本昔話通観 第16巻 (兵庫) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七八『三匹猿』「日本昔話通観 第17巻 (鳥取) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七八『えびとなますと大鳥』「日本昔話通観 第17巻 (鳥取) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七九『三匹の猿 (類話)』「日本昔話通観 第19巻 (岡山) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七九『竹切り爺 類話12』」「日本昔話通観 第19巻 (岡山) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七九『果てなし話 (類話5)』「日本昔話通観 第19巻 (岡山) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九七九『だまされ狐 (類話1)』」「日本昔話通観 第19巻 (岡山) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八〇『恋の道』「日本昔話通観 第24巻 (長崎・熊本・宮崎) 同朋舎出版、稲田浩二「ほか」一九八〇『なます騒動』「日本昔話通観 第24巻 (長崎・熊本・宮崎) 同朋舎出版、今村明恒 一九四一『鯰のざれごと』三省堂、巖谷小波 一九七八『鯰浄覚』『説話大百科事典 第七巻』名著普及会、巖谷小波 一九七八『鯰の命乞』『説話大百科事典 第七巻』名著普及会、江原絢子 二〇〇一『日本の食文化史年表』吉川弘文館、遠藤元男「ほか」一九八三『飲食 日本史小百科』16 近藤出版社、大口町教育委員会 二〇〇五『ナマズの清水』「大口町のむかしばなし」大口町歴史民俗資料館、小田輝吉 二〇〇五『おしよナマズ』「山口県の民話』借成社、狩野敏也 一九九五『平成の鯰料理探訪』鯰絵馬里文出版、川上行藏「ほか」一九九〇『日本料理由来事典・中(すゝわ)』同朋舎、川上行藏 二〇〇六『食生活語彙五種便覧』岩波書店、小暮正夫 二〇〇六『三川測の大なます』「日本の怪ぶつ話』借成社、白鳥庫吉「ほか」一九七八『日本民俗文化体系「9」』小学館、鈴木棠三 一九八二『日本俗信辞典』角川書店、坪井洋文「ほか」一九九五『日本民俗文化体系「10」』小学館、日本児童文学者協会 二〇〇四『おしよなます』「山口の民話』借成社、日本児童文学者協会 二〇〇〇『竹生島とナマズ』「滋賀県の民話』借成社、日本児童文学者協会 二〇〇〇『ナマズ神のほこら』徳島県の民話』借成社、日本児童文学者協会 二〇〇〇『山下淵の大ナマズ』長崎県の民話』借成社、日本風俗史学会 一九八九『図説江戸時代食生活事典』雄山閣、鈴木棠三 一九八二『日本俗信辞典 動・植物編』角川書店、野村敬子 二〇一三『柳本伝承・ナマズの恩返し』「柳本文化への誘い」25 國學院大学 下野新聞新書、野本寛一 二〇一三『食の民俗事典』椋風舎、野村純一「ほか」一九八四『多鯰が池 (類話)』「日本伝説体系 第11巻 山陰編』みずうみ書房、狹間町教育委員会 二〇〇四『馬貝塚氏は、なますに乗ってきた』「狭間町の伝統と民話 第2集』狹間町教育委員会、福田晃 一九八八『鯰食わず』「日本伝説体系・第8巻 北

近畿編「みずうみ書房、福田晃「ほか」一九八二「次郎池の大鯰」類和」『日本伝説体系第「12」巻四国編「みずうみ書房、福田晃「ほか」一九八二「鯰住ます」』日本伝説体系第「12」巻四国編「みずうみ書房、福田アジオ 二〇〇〇『日本民俗大辞典』吉川弘文館、藤沢篤彦 一九五六「鯰男」『日本民族伝説全集 第2巻』関東篇、河出書房、藤沢篤彦、藤沢篤彦 一九七六『要石と地震鯰』『日本民族伝説全集 第2巻』関東篇、河出書房、藤沢篤彦 一九七二『図説 日本民俗学全集第2巻』高橋書店、名著普及会 一九七九『鯰の命乞』世界神話伝説大系、町田喜代美『巴波の鯰』二〇〇六『ちぎの民話シリーズ』スタディックアソシエ、迷信調査協議会 一九八〇『地震とナマズの謎』『俗信と迷信』洞史社、森浩一「ほか」一九七八『日本民俗文化体系「14」』小学館、宮田登「ほか」一九九五『日本民俗文化体系「9」』小学館、宮田登「ほか」一九八五『日本民俗文化体系「11」』小学館、民俗学研究所 a 一九五五『綜合日本民俗語彙 第一巻』平凡社、民俗学研究所 b 一九五五『綜合日本民俗語彙 第三巻』平凡社、柳田國男 一九七〇『綜合日本民俗語彙 三巻』山中清次『下野民俗研究会』二〇〇四『ナマズの恩がえし』『読みがたり栃木のむかしはなし』下野民俗研究会 日本標準、湯浅良幸 二〇一〇『露田測の白なます』『阿波の民話 第3集』徳島新聞社、湯浅良幸 二〇一〇『大蛇と大なます』『阿波の民話 第3集』徳島新聞社、湯浅良幸 二〇一〇『上大野の白なます』『阿波の民話 第6集』徳島新聞社、湯浅良幸 二〇一〇『杉森さんの白なます』『阿波の民話 第9集』徳島新聞社、湯浅良幸 二〇一〇『若津の大なます』『阿波の民話 第10集』徳島新聞社、湯浅良幸 二〇一〇『川田のナマズ神』『阿波の民話 第13集』徳島新聞社、武者金吉 一九五七『地震なます』東洋図書、作者不詳 一八八〇『鯰退治筆之鉾権理』開成社、関沢紀 一九九四『鹿島七不思議ものがたりなますの石』新泉社、伊藤龍平 二〇〇四『大鯰に遭った俳人の

話』『雪窓夜話』冒頭語をめぐって』『國學院大學近世文学会会報10』國學院大學近世文学会、國學院大學栃木短期大学口承文芸センター 二〇〇五『大塚政和述・巴波川のウナギとナマズ』『ナマズの恩返し』『栃木・短大生が聴いたむかしむかし』星の環会』を追加している。

(11) 半田隆夫『神神と鯰』一九九六 私家蔵 pp.9-23, pp.35-46, pp.51-59, p.77. 半田隆夫『神神と鯰』一九九八 私家版 pp.9-11, pp.13-14, pp.26-36, pp.41-42. 半田隆夫『神神と鯰 続一』二〇〇五 私家版 pp.9-11, pp.27-34『生き物文化誌学会 福岡例会』講演資料・萩生田憲昭『鯰絵馬—その所在と俗信』『ナマズの博覧誌』pp.166-167『鯰絵馬の所在地』一覽、『球磨弁珍語録』二〇〇五、『みどころ紹介』二〇一〇 人吉新聞社、人吉新聞 二〇一二年七月九日『みどころ紹介』人吉新聞 二〇一六年十一月十九日『ニューストピック』掲載記事(二〇〇六年十月十八日、二〇一〇年四月十九日、二〇一二年七月九日、二〇一三年五月三日)、熊本県球磨郡相良村の上川阿蘇神社、人吉市井ノ口町の井口八幡神社、球磨郡錦町木上北の二宮神社他、現地調査する過程において得ることができた新しい寺社を追加。

(12) 岐阜県教育委員会、岐阜県博物館編 一九八一『美濃の絵馬』p.20. 関市教育委員会『関市史 民俗編』一九九六 ぎょうせう p.675. 尼崎郷土史研究会編 一九八八『尼崎の絵馬』p.11. 森誠一 二〇〇七『生き物文化誌としての「鯰」—三重県徳蓮寺の鯰絵馬から見えてくること』『ピオストーリー』8 pp.98-107. 松井魁『うなぎの本』一九七七 柴田書店 p.269. 上南都誌編集委員会『上南都誌』一九六三 南都川村 p.589. 和歌山県立博物館編 一九七八『紀州の絵馬』掲善継『紀州の文物にみるウナギ伝承・伝説』『紀伊風土記の丘研究紀要第3号』二〇一五 和歌山県立紀伊風土記の丘 pp.11-20. 掲善継『地震だけではない、人とのかかわり』『生きもの日誌』二〇一五 日本緑化センター pp.34-35. 近藤雅樹『ねがい・うらな

- い・おまじなご欲望の造形」二〇〇〇 談交社 p.27、上妻国雄「宗像伝説風土記・上」一九七八 西日本新聞社 pp.30-53、賀茂校区明るい町づくり実行委員会編 一九九六「免の里をたずねて」pp.5-6、上妻国雄「宗像伝説風土記・上」一九七八 西日本新聞社 pp.122-124、堀内研一「鯨の石絵馬」『天津歴史』ほれ話 二〇〇六 明日の観光大津を創る会 pp.56-57、錦町教育委員会編 二〇一六「錦町合併60周年記念 錦町の文化財」p.88、熊本日新聞社編集局編 一九八七「新・阿蘇学」pp.42-43、天理大学附属天理参考館編 一九七八「祈願小絵馬」p.6、菅水村誌編集委員会編 一九七二「菅水村誌」pp.677-678、中津市編 一九八五「ふるさと」の歴史」pp.98-99、秋満良紀「豊国の神々」大分合同新聞 一九九五・九・十八、鍋島正史 二〇一一 手記 pp.78、武蔵野美術大学民俗資料室、中嶋敬介「おまじなご」の背景」『ふんふん』第80記念特号、甲佐町文化協会 pp.25-27、半田市博物館編 二〇一〇「知多の絵馬」p.82、名古屋市博物館「祈りの歴史—絵馬—」一九八二 名古屋博物館 p.39、奈良県立民俗博物館「日本人の祈り 小絵馬」一九八一 奈良県立民俗博物館 p.13、相賀徹夫『法隆寺の至宝 第6巻』一九八六、小学館 p.213、310、北條時宗『小繪馬圖聚』一九七六、木耳社、城陽市歴史民俗資料館編 二〇一四「願ころころ絵馬ころころ」p.7、田中俊次 一九一八「繪馬かゝ美 第二集 第二集之2」、田中緑江 一九二七『小絵馬集第一輯』郷土趣味社、鯖江市教育委員会編 鯖江市まなべの館企画展「よみがえる絵馬」祈りと願いのDNA」二〇一一 鯖江市教育委員会、福井県立博物館図録 一九九三「特別展 絵馬 EMA GALLERY」p.200、徳島県文化振興財団「石井真之助小絵馬コレクション」二〇〇六 徳島県文化振興財団徳島県郷土文化会館 pp.12-13

(13) 昭和四十八年六月の調査「徳蓮寺絵馬の内容とその年代」について、一鯨

- と鯨」の絵馬は128枚、「鯨」の絵馬は33枚であり、万治1年が最古と調査結果が記載されている。「なます一匹」の構図が33枚、「うなぎとなます」の構図が128枚ある。(佐野賢治「虚空蔵菩薩信仰の研究—日本仏教受容と仏教民俗学—」一九九六 吉川弘文館 P.204)
- (14) 「大正年間(一九一七—二六)の金比羅堂修復にとまがて発見された小絵馬が多数現存する。この中には江戸時代中期、享保〜宝暦年間(一七二六—六四)の紀年銘をもつ絵馬も十数点あり、奉納年の記されないものも、その形態・図様からほぼ江戸中期から後期の奉納によるものと考えられる。江戸時代の小絵馬で奉納年の判明するものがまとまって現存する例は、愛知県内にはほかに確認されておらず、近世の庶民信仰の姿を伝える資料として貴重である。また、図様に鯨を描くものが多い点にも特色がある。」「泉蔵院に伝わる小絵馬の図様には本資料のような鯨、あるいは白鯨を描くものが多く、皮膚病の一種「癩(なます)の語呂合わせで黒癩・白癩とった病気の平癒祈願に奉納されたものとも考えられるからである。(南知多町誌編さん委員会『南知多町誌資料編6』一九九七 南知多町 pp.770-771)
- (15) 中津市編 一九八五「ふるさと」の歴史」pp.98-99
- (16) 大分合同新聞「豊国の神々」一九九五年九月十八日掲載記事
- (17) 半田市博物館編 二〇一〇「知多の絵馬」p.82
- (18) 【5】における絵馬の年代は調査中である。
- (19) 蒲郡市博物館 一九九一 図録「蒲郡の絵馬」p.12、24
- (20) 実見調査では文字がほぼ消えかき確認しつらいため図録(福井県立博物館図録 一九九三「特別展 絵馬 EMA GALLERY」p.180)を提示している。
- (21) 大正七年(一九一八)発行の田中俊次編『繪馬かゝ美』p.163
- (22) 萩生田憲昭「鯨絵馬と癩病との関わり」『ナマズの博覧誌』二〇一六 誠文堂新光社 p.162

- (23) 項目外ではあるが「鯰」と黒字で書かれた文字のみの板もある。他、静岡県の尊永寺ではナマズの絵馬の裏に同じ皮膚病祈願の蛸の図が描かれている。また、右上から左斜め下に向かってナマズが描かれている構図の絵馬は、阿波の特徴であるという関係者の声もあったが、その構図は福島県の丸岡町白山神社にも多数所在していたため現段階では根拠はないと判断している。
- (24) 荒井富三『繪馬の國』一九四〇 四國民報社 pp.72,73
- (25) 永田誠吾『祈りの絵・淡路島の絵馬』二〇〇五 教育出版センター p.146
- (26) 気谷誠 一九九五『黒船と地震鯰―鯰絵の風土と時代』宮田登・高田衛監修『鯰絵―震災と日本文化』(里文出版出版) p.232より提示している。萩生田憲昭「鯰絵馬と癩病との関わり」『ナマズの博覧誌』二〇一六 誠文堂新光社 pp.170-171
- (27) 佐山半七丸「女子愛敬」都風俗化粧伝上」一八一三 秋田屋大右衛門ほか(添付資料)。佐山半七丸『都風俗化粧伝』二〇〇六 平凡社 pp.29-30, pp.35-36 (訳)
- (28) 佐山半七丸『都風俗化粧伝』二〇〇六 平凡社 p.270
- (29) 萩生田憲昭『鯰絵馬と癩病との関わり』『ナマズの博覧誌』二〇一六 誠文堂新光社 pp.178-179, pp.168-170
- (30) 加藤光男『鯰絵総目録』『鯰絵』一九九五 里文出版 p.270
- (31) 内藤記念くすり博物館『はやり病の錦絵』二〇〇一 P.6
- (32) 永田誠吾『祈りの絵・淡路島の絵馬』二〇〇五 教育出版センター p.300